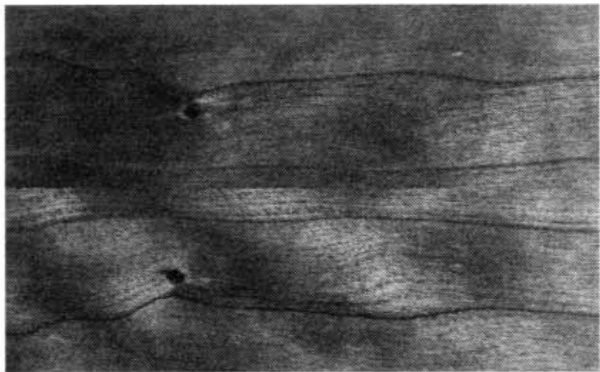
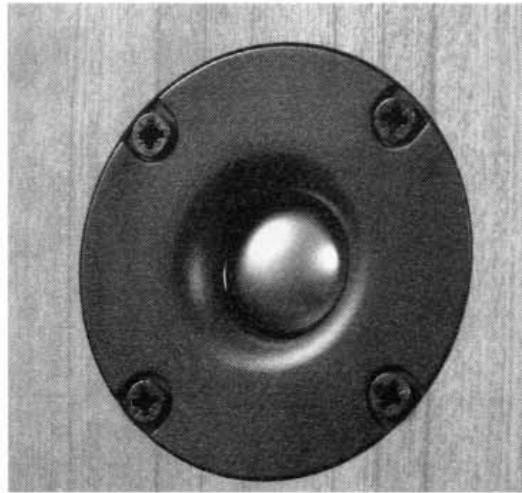




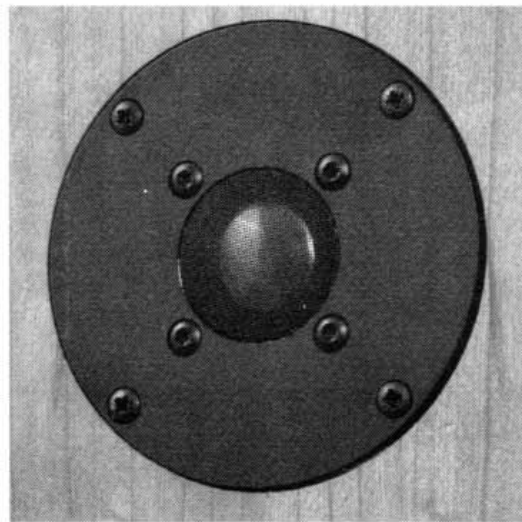
ウーファーはHLコンパクト7ES-2と同じ「RADIAL」コーンを採用した200mm口径。ポリプロピレンに混入するアルミニウムの配合量を、中心から周辺にかけて変えたダイアフラムは、高精度射出成型機で作ることで優れた物性を確保している



エンクロージャーは光沢を持たないチェリーの突き板仕上げ。基材との間には経年変化に強く、構造体として粘りがあるマホガニーを挟んでいる。



きわめて軽量なチタン・ダイアフラムの20mm口径スーパートゥイーター。ネオジウム・マグネットによる強力な磁気回路を搭載し、10kHz以上を受け持っている



メイン・トゥイーターは25mm口径のアルミニウム・ダイアフラムのハードドーム。磁性流体によるクーリングで大入力時の発熱を効果的に放熱し、安定した特性を保持している

ハーブスピーカー HL5 ¥49,800 (税込)

サウンドレポート

▼かつてのベストセラー機HL5の改良バージョンである。3ウェイのバスレフ型だが、ハーブスの思想では、2ウェイ+スーパートゥイーターという構成で、スーパートゥイーターは10kHz以上を受け持っている。SACDやDVD-Aに対して、最も本格的に対応したモデルだといつていいだろう。それだけに、表現の幅はかなり広い。まず情報量が非常に多い。低音は豊かで、ローエンド方向の沈み込みが深い。弦の倍音が豊かで、美しい艶がのるのは本機だけの個性だ。エネルギーバランスは安定しており、分解能もかなり高い。まとものいいHL Compact 7ES-2に対し、こちらはまともよりもスケール感と情報量で勝負している。

(貞山)

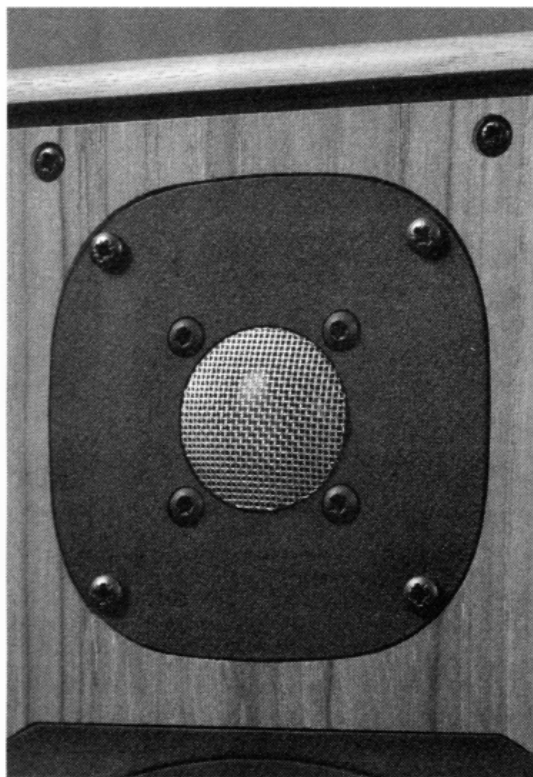
▼エンクロージャの奥行きは、HLコンパクト7ES-2よりも、10mmほど浅いが、幅、高さは大きい。ウーファーは、20cm口径のRADIALと呼ぶ振動板で、ポリプロピレンを主体とし、アルミニウム粉を加えてコントロールしたタイプ。7ES-2とまったく同種。ハーブス社として、新しさを感じさせるのは、アルミドームトゥイーターに加え、チタンドームによるスーパートゥイーター(10kHz以上)を装着させ、再生高域限界を伸ばさせていることだ。これもあって、一聴してワイドバンド。データ上は月並みだが、聴感上は確実に伸張。音像にボケがなく、ステージイメージは良好。ウォームで雑味がない。SACDも高SN比、ワイドバンド。文句なしのウエルバランス。

(藤岡)

サウンドレポート

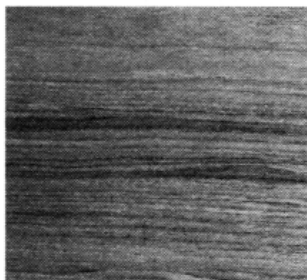
▼中型のバスレフ、ブックシェルフ型2ウェイのシステム。1994年発売のHL Compact7が10年ぶりに改良された。どこか懐かしい響きを感じるのは、前機のサウンドを懐かしく思い出すからだろう。3機種の中で、ハーベスト伝統の響きを、最も濃厚に反映したのが本機である。どの音域でも平均したエネルギーが得られること、ボーカル帯域での減衰がないことは、どの機種にも共通する特徴だが、本機のエネルギーバランスは、バリエーションといえるほど整っている。コントラバスや大太鼓の音像は、等身大とまではいかぬが、適度な大きさを保ち、低音のリズムはダイナミックかつ、弾力感をもって表現できる。音場の透明度は高く、音色変化も多彩である。 (貝山)

▼現在のハーベスト社において、最も同社らしいクオリティとソノリティを持つのが本機だと思ふ。充分に選択され、巧みなネットワーク設計と、正統的キャビネット……。出力音圧レベルについては、相変わらず低エネルギーで、平均的システムの半分程度。それでも密閉型エンクロージャのHL P3ES-2と比べれば、2倍のエネルギーはある。ただし、気にすることはない。繰り返されるサウンドは、いわばハーベスト・オリジナル。ナチュラルでウォーム。透明度、分解能といった項目よりも、直接音と間接音の比率と、溶け込みが素晴らしいからだ。低域方向は、たっぷりとし、中域周辺もソフトで聴きやすい。SACDでも穏やか。この雰囲気は広く音楽ファンにはお薦めである。 (藤岡)

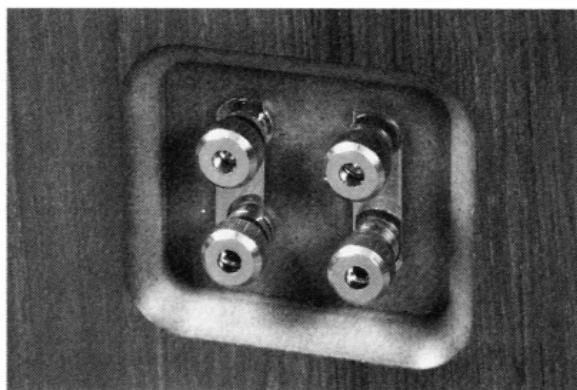


メッシュ状のプロテクターに守られたトゥイーターは25mm口径のアルミニウム・ハードドーム。磁性流体によるボイスコイルの冷却で大入力にも安定した特性を維持できる

エンクロージャの仕上げはチークの突き板仕上げで、光沢は持たせていない。基材のMDFとの間には経年変化に強く、粘りのあるマホガニーを1層入れている



オリジナル開発の自社製「RADIAL」コーンを採用した200mm口径ウーファー。ポリプロピレンに混入するアルミニウムの配合量を中心から周辺にかけて変えることで、低音域から中高音帯域まで色付けのないスムーズな再生を実現している。エッジは通常とは違う逆エッジ



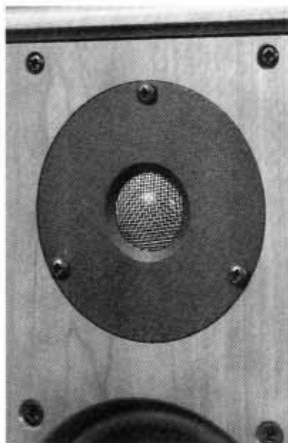
バナナプラグに対応したバイワイヤリング端子。しっかりとしたジャンパープレートが付いている



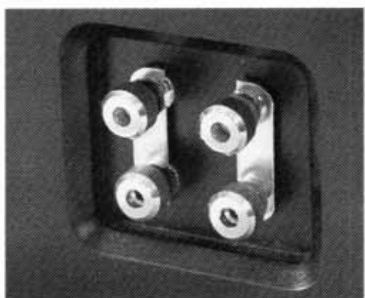
110mm口径のウーファーはリアマウントによりトゥイーターよりやや後方に配置。クロスオーバー付近の位相特性と、軸上のパワーレスポンスの最適化を図っている。ダイアフラムはPPコーンで25mmのアルミ・ボイスコイルを使用している



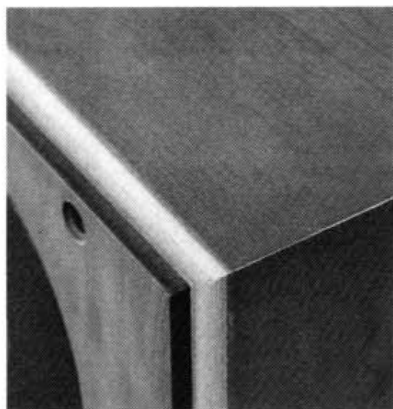
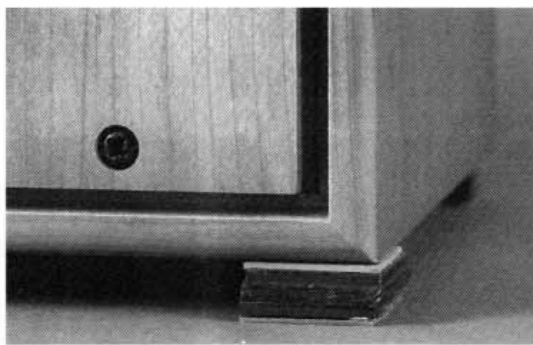
アルミニウム・ダイアフラムの19mm口径ハードドーム・トゥイーター。磁性流体の採用で放熱効果を高め、耐入力の上を図っている



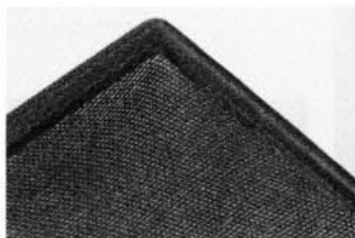
HLシリーズで最も小型の本機もバイワイヤリングに対応している



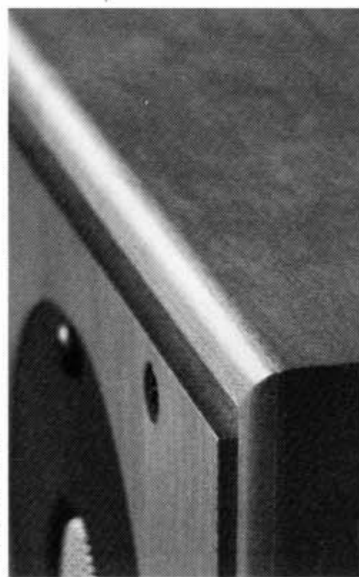
上位モデルから「スーパー・チューンド・ストラクチャー」を継承。天地・左右の4面を振動させることで響きをコントロールしている。セッティングはその振動を妨げない工夫が必要



エンクロージャはチェリーの突き板仕上げ



フロントバッフルも上位モデルと同様に回折効果を抑えるためラウンド処理されている。また、装着が推奨されているジャージー素材の「スーパー・グリル」は、フロントバッフルの外周部の溝に埋め込みスムーズな音波伝播を得ている



サウンドレポート

▼11cmのウーファーとアルミハードドーム・トゥイーターを組み合わせた2ウェイブックシェルフ。このサイズの密閉型は最近では珍しい。エンクロージャの振動には最新の振動解析データを反映している。小型の割には豊かな低音が出せるウエルバランスのモデルで、ウーファーとトゥイーターの量的なつながりがよく、中抜けのない充実したサウンドが得られている。ポーカーでは温かく血が通い、合奏曲では、全帯域に均一なエネルギーが配分されている。弦の高音では豊かな倍音があり、シルキーな美音となる。正面のグリルなしだと、倍音成分が少し過剰気味となるので、グリルを付けた状態での使用をお薦めする。分解能の高さ音色変化の表現もこの価格帯の水準以上だ。

（負山）

▼このコンパクトな2ウェイシステムには、系譜がある。源はBBC向けのLS3/5A。これを母体に、民生用に新しい技術を入れたのが、HL P3、そしてHL P3ESである。耐入力を大きくし、入力端子も4端子化。トゥイーターもハードドーム化するなど、これらには、ハーベスとしての技術が注入されている。本機はこの流れの中の最新バージョン。最大の弱点を指摘すれば、出力音圧レベル（能率）の低さだ。83dB（6Ω）である。組み合わせるアンプは、出力量と駆動力について吟味すること。中低域は厚手。普通の音楽ソースでのバランスは良好。音楽のエッセンスを充実させて聴かせる。ソースを選ばず、破綻がなく信頼性が高くSACDもウエルバランス。

（藤岡）

ハーベス HLSシリーズ

メーカー・プロフィール

1977年にH・ダッドリー・ハーウッドにより、ハーベス・アコースティック社がロンドン郊外のウエスト・クロイドンに創立された。ハーウッドは長年BBCの技術者として活躍、その間にBBCのモニタースピーカーの開発に携わっていた。その経験から、自然で色付けがなく、エネルギーバランスのとれた音をコンセプトに掲げ、同年に1号機「モニターHL」を発売している。その後、BBCの基準に適合した数々のモニター用スピーカーを手がけてきた。87年にハーウッドはアラン・シヨーンに全権を委ねている。現在の商品構成はモニター20、30、50のマスター・シリーズと、今回取り上げているハイファイ・シリーズの2つのライン。スーパーHL5はHL（ハーベス・ラウドスピーカー）ラインとして創業以来6世代目になる。同社の製品で最大の特徴としてあげられるのがエンクロージャアの「スーパー・チューンド・ストラクチャー」。一般的にはキャビネット内部の補強や、重量ある材料で鳴きを押さえているが、同社ではそれとは異なり、性質の異なる素材を重ねたサンドイッチ構造で、ハイスピードにダンピング

している。また、コーン型ユニットの振動板にポリプロピレンを採用しているのも特徴で、特に「RADIAL・コーン」は他の素材に比べ、固有の色付けのないことを強調している。トルボイ型全盛だが、長年のモニター造りの伝統を引き継いだオーディオックスなスタイルが守られている。

(遠藤)

サウンドポリシー

▼社名は変わったが、スピーカーに対する基本ポリシーは変わっていない。一貫しているのは、エンクロージャの振動を音造りの一環として捉えていること。箱を振動させながら、音を整えるという手法は現在でも続けている。エンクロージャをリジッドに固めても振動は残ること考えると、同社の手法は極めてリズナブル、かつ効率のいい方法だといえる。だが、箱を振動させながら音を整えるという技法は難しい。それをなす遂げた同社のノウハウと技術には脱帽ものだ。もちろん、SACDやDVD-Aの普及にともなうマイナーチェンジも疎かにしていない。ここにあげた3機種は新し



いハーベス・オーディオを代表するニューモデルである。

(貝山)

▼オールドファンなら、誰もが知っていると思うが、ハーベスは、BBCのコンパクト・モニターLS3/5Aを生産した、いくつかのメーカーのひとつ。ということも

あってスピーカーシステム・メーカーとしては、どちらかというと保守派に属し、奇をてらったシステムは、これまで一度も生産したことはない。企業規模はいたって小さいが、正統的設計方式が広く認められ、市場は全世界に及ぶ。エンクロージャは今も昔も箱形だが工作精度は高く、どちらかというとユニットとエンクロージャの響きのコラボレーションを訴求している。ユニット構成も2ウェイが主力。しかし、最近になってハイスペックデジタル・オーディオへの対応をスタートさせ、高域再生限界を伸張させた製品も登場した。

(藤岡)